

主催シンポジウム

東京都立大学ボランティアセンター
シンポジウム2020

首都大から都立大へ、
新たなビジョンと共に歩み出す未来

2020年11月1日（日）

報告



オンラインシンポジウムを開催！

11月1日（日）に、「ボランティアセンターシンポジウム2020～首都大から都立大へ、ビジョンと共に歩み出す未来～」をオンライン（Zoomウェビナー）で開催し、関西の大学に在籍する学生や都内の高校生など、学内外から36名の方にご参加いただきました。

今回は、都立大生や日頃から連携している学外の団体の方々にいただいたご意見もとに、センターに関わる学生・教職員が丸となって策定した“ビジョン（2020-2025）”を今回初めてお披露目したほか、トークセッションなどを通してこれまでの取組やビジョン策定に込めた想いを発信しました。

また、進行や運営の多くを学生コーディネーターが行うなど、本センターらしい学生手作りのシンポジウムとなりました。

発表

首都大ボラセンの4年間で都立大ボラセンの現在

発表者：足立 陽子（元 本学ボランティアコーディネーター）
齋藤 元気（本学ボランティアコーディネーター）

足立さんからは、「ボラセンが開設された2016～2019年の4年間」についてお話いただきました。何もないところから始まったセンターですが、開拓していく中で学生の自主的な活動がどんどん生まれていき、取組自体の量や質、職員の体制も充実していったとのことでした。

今回改めて、センター設立当初まで遡りながらこれまでの取組についての話をお聞きしましたが、学内外の団体への支援を整備・強化したことによって、現在のような支援体制の充実につながり、それによってコロナ禍でも様々な取り組みができたのだと感じました。現在も感染症の影響によって学生団体が思うように活動できない状況は続いているようですが、相談支援や保険料補助などを通して、本センターが学生団体の力になれるように取り組んでいきたいと思えます。

齋藤さんからは、今年度の課外活動の動きとして、コロナ禍においても学生コーディネーターとのミーティングは継続して行い、「学内登録団体との情報交換会」や「新入生に向けたボランティア相談会」といったオンラインイベントの実施につなげてきたという話がありました。

また、ボランティア活動は「本人の自由な意思に基づくことの」が前提でありながらも、大学からは「自粛のお願い」しか出せない状況があったからこそ、センターからはなるべく制限に関する情報ではなく、よりよく活動するうえでのヒントや注意事項など、前向きな情報を発信しつづけてと取り組んできたという話もありました。

トークセッション1

「TMUボラセンのDNA」

ファシリテーター：石川 陸矢（学生コーディネーター）
パネリスト：足立 陽子（元 本学ボランティアコーディネーター）
神保 彩乃（本学 2019年度卒業生／元 学生コーディネーター）

都立大ボランティアセンター（TMUボラセン）を設立当初から、長く支えてきたお二人と、これまでの歩みを振り返るトークセッションを実施し、それぞれの経験や思い出からボランティアの意義や“TMUボラセンらしさ”を探っていきました。

1年生の時から積極的に活動していた神保さんには、「ボラセンとの出会い、センターに行こうと思ったきっかけ」や「4年間で振り返って思うこと」などの話をお聞きしました。

現在社会人として活躍する神保さんですが、自身の経験を振り返りながら「社会の中で、そしてコロナ禍で、制限がある中で思考を停止するのではなく、“これならできる”という発想力やエネルギーが大切。これはボランティア活動を通して学び得た」と語っていました。「4年間の大学生活の中でボランティア活動を通して得た経験や気づきが、とても貴重で、その先の人生につながる力になった」ということを、神保さんの力強い言葉から感じました。

■ トークセッション1の様子



センターの設立に尽力された足立さんには、「首都大のボランティアコーディネーターに応募した理由」や「大学ボランティアセンターに対してのこだわりや思い」についてお聞きしました。足立さんは、『大学生という時期にキャンパス内に留まらず、社会に飛び出しボランティア活動を通して社会課題や矛盾に気づいてほしい。自分事として考え行動して、活動で得た学びとキャンパス内で得た学びをリンクさせてほしい』という思いが大学生のボランティア支援にこだわる一つの理由であると話されていました。この思いは、センターがこれまで大事にしてきた文化（DNA）でもあります。だからこそ、センターの今後にしっかりとつなげていくことが大切だと改めて感じました。

～質問コーナー～

質疑応答の内容を一部紹介します

都立大のボランティア活動は、単位取得に結びつかないの
ことですが、善意をあてにするだけでは難しいものがある。
貴センターでは、どのように受け止めていますか？



足立：両方メリットとデメリットはあると思う。授業に取り入れるこ
とで裾野は広がるかもしれないが、授業ではないことの、自発
的な活動だからこそ良さがある。経験上、自発的な活動である
ことにより、範囲を決めず新たな提案が生まれやすくなるが、
授業になるとその域を超えないことも多いような気がする。

神保：極端な話かもしれないが、やはり“やりたい人がやる”というこ
とが大事だと思う。自分の価値観の中で、強制につながるよう
なものではなく、“やってみたくて行く”というようにボラン
ティアを捉えている。

石川：自分は課外活動として取り組んできた中で、活動を通して視野
が広がったり、自分が挑戦してみたいものを自主企画として取
り組んだりすることができて良かったと感じている。だからこ
そ、単位のためではないボランティアがとてもいいと思う。

発表 ビジョン（2020-2025）

発表者：室田 信一（人文社会学部 人間社会学科 准教授）

室田先生にはビジョン策定ワーキングチームのメンバーを
代表し、今回新たに策定した5年後のボランティアセンター
の未来像を表す「ビジョン（2020-2025）」について、策定
に至った経緯やその過程、内容やそこに込めた想いをお伝え
いただきました。

当日お披露目されたビジョンの内容

- ▶ 自発性をはじめとするボランティアの価値や意義が、都立大の文化として
育まれ、その文化が地域、世代を超えて、日常生活に広く浸透している。
- ▶ 学内外を問わず、学生、卒業生、教員、職員、地域住民、関係機関など
多様な人がボランティアセンターを通してつながり、ともに考え、
一人ひとりが誇りと愛着をもち居場所を感じられる地域になっている。
- ▶ ボランティア活動を通じた多様な他者との学び合いにより、学生一人
ひとりが、社会への問いや新たな自分への気づきを得て、リーダーシップ
を発揮し、社会に自ら働きかけている。
- ▶ 社会の変化を捉えて、与えられたものにとどまらず、既存の枠組みや
概念を超えて、学生が自ら生み出す新たな活動や取組が広がっている。

トークセッション2

「私たちの未来を描こう！～ビジョンに託した想いと〇〇な話～」

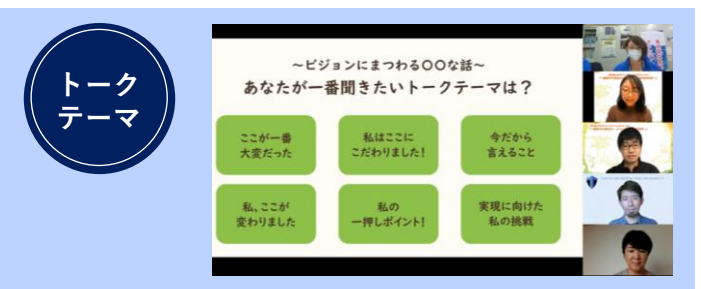
ファシリテーター：大貫 真奈（学生コーディネーター／健康福祉学部 4年）
パネリスト：室田 信一（人文社会学部 人間社会学科 准教授）
信太 奈美（健康福祉学部 理学療法学科 准教授）
石川 陸矢（学生コーディネーター／都市教養学部 4年）
大和田 直子（ボランティアセンター事務職員）

ビジョン策定に携わったワーキングチームのメンバーから
策定の裏側についての話を聞いたトークセッション2では、
出演者と一般参加者（投票）からそれぞれトークテーマを選
んでいただきました。

登壇者が選んだ『ここが一番大変だった！』のトークでは、
多くのメンバーがビジョンの策定経験がなく、どのように進
めていいのかわからなかったという戸惑いの部分について、
さらに、想いや考えを言葉にすることの難しさについて話し
ていました。「当初は発言を躊躇していたこともありましたが、
チームの皆さんの雰囲気やファシリテーターに支えられ、
発言が活性化されていった」という話もあり、策定過程での
チームの変化についても語られていました。

参加者の方に投票で選んでいただいたトークテーマ『実現に
向けた私の挑戦』では、それぞれの立場を踏まえて、信太先生
からは、「荒川キャンパスの専門性を活かし、荒川という地域
でどういう活動ができるか挑戦したい」というお話が、石川さ
んからは、「自分自身が先輩の影響を受けてここまで活動して
きたからこそ、自分もそういう立場になりたい。ボランティア
の経験を研究などの別のフィールドで活かして社会で活躍する
ことが自分の挑戦」というお話がそれぞれありました。足立さ
んからは、「同じマインドをもった人が日本中、世界中にいる
ことが強み。どこにいてもボランティアで培った社会を見る目、
ボランティアーマインドはどこに行っても活かせる」というお
話がありましたが、5年後にビジョン策定に関わった人がセン
ターには居ないかもしれない状況に対してのみならず、一人ひ
とりが社会の中で生きる市民としての考え方・関わり方として、
この先へつながる力強い言葉だなと感じました。

最後は「私が描く5年後の都立大ボラセン」というテーマで
ボラセンに対するそれぞれ夢をお聞きました。「都立大ボラ
センが活発だから都立大を選んだという学生が増えていると嬉
しい（室田）」「ビジョンに含まれているような、繋がりを持
ち続ける卒業生でありたい、自分が4年間で感じてきたことを
ボラセンに還元できる活動をしたい（大貫）」といったそれぞ
れが思い描くボラセンの姿には、これまで積み重ねてきたもの
とこれからへの前向きな期待がいっぱいに詰まっていました。



閉会の挨拶

最後に、ボランティアセンター長の清水敏久先生（本学 副学
長／システムデザイン学部 教授）から、閉会の挨拶として「本
学のボランティア活動のプログラムが文化として根付いており、
そこから育っていく学生はボランティアの心をもちながら社会
へ出ていく。そのような人たちが世の中に増えていくことが希
望である。ぜひ在学中にボラセンに積極的に参加し、つなげて
いってほしい」という言葉をいただきました。

参加者の感想

- ・ 学生やコーディネーターの今までのがんばりのもとボランティアセ
ンターが大きく発展してきたと感じられたことはもとより、組
織や立場に関係なく、各自が素直に自分自身の想いや考えを述べて
いたところが良かったと思った。
- ・ ビジョンというものがそれ自体で未来を意識することですが、何よ
りも大学という人が入れ替わるという組織の性質の中で、組織や地
域の将来への発展が継続していくことを一人ひとりがしっかりと意
識していることを感じて嬉しくなった。
- ・ 学生たちが主体となって、自発的に作り上げていくことのできる環
境であることが強く伝わってきた。地域との関わりを大切にされて
いる姿勢に魅力を感じた。
- ・ 大学は人が入れ替わることが前提の仕組みになると思う。居る期間
をどう充実し次につなげるか、今とてもいい関係が学内外とも得ら
れていると感じたので、引き続き維持しつつ、それぞれのチャレン
ジを足し算していただければと思う。